

戦前期上海裕孚系の企業グループと 長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易(七)

和田 正広・翁 其銀

三 寿康薬行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

3 寿康薬行の輸出漢方薬の統計と分析

(2) 上海寿康薬行から輸出された一般の治療薬についての統計と分析（以上・第14巻第1号）

(3) 上海寿康薬行から輸出された貴重な滋養薬についての統計と分析(本号)
滋養薬は中国語で補薬という。翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』は次のように述べている。「漢方医学の理論によれば、虚と実とは体力の質的な程度を表すものさしであり、体力が充実しすぎている状態を実証、体力が弱すぎる状態を虚証という。実証に対しては、あり余った部分を取り去る‘瀉’の作用のある‘瀉薬’を使い、虚証に対しては、不足した部分を補う‘補’の作用のある‘補薬’を使って、過不足を調整する。」⁽¹⁾

上海寿康薬行が漢方薬三角形販路を通して台湾の関係商社に輸出した薬材は、治療薬以外にも滋養薬即ち補薬などがある。本節では、その幾つかの品目、とりわけ貴重な滋養薬の取引データを統計・分析したい。

A 人参の取引についての統計と分析

人参は長崎泰益号の仲介により上海寿康薬行から台湾関係商社へ輸出された貴重な滋養薬の重要な品目である。以下では、1927年から1930まで長崎泰益号宛て上海寿康薬行に残存する一部分の書簡によって台湾の入荷商社に対

する該薬行の人参輸出関係データの統計と分析をこころみたい。

表1 泰益号の仲介による寿康薬行の人参輸出の部分データの統計⁽²⁾

出荷期日	薬種名	単位	総重量	純重量	輸入商社	地域
1927.11.27	高麗参	郵送子包 1包		10斤	謝協源薬行	員林
1928.2.26	紅参鬚	1件		100斤	同上	員林
1928.4.15	参鬚	1件		57.68斤	栄徳商行	彰化
1928.4.20	紅参	7包		30斤	謝協源薬行	員林
1928.6.2	参	郵送箱 1箱		40斤	同上	員林
1928.6.5	紅参	6包		30斤	同上	員林
1928.6.7	紅参	2包		10斤	同上	員林
1928.7.30	石柱参	4盒		22.7斤	同上	員林
		5盒		25斤		
1928.8.5	石柱参	1件			同上	員林
1929.4.3	石柱参	8匣			同上	員林
	抄参	8包				
1929.7.8	紅参	33包		75斤	同上	員林
1929.7.23	紅参	23盒			同上	員林
1929.7.25	紅参	1盒	75斤		同上	員林
	参鬚	1盒	10斤			
1929.10.1	天字別直参 (最高級の人参)	1盒	(該人参は 太く重く1 盒に1本だ け詰める)	1斤(その 代価は116 銀両であつ た)	(泰益号)	(長崎)
1930.2.3	参	1件		240斤	謝協源薬行	員林
	人参	2支		1斤		
1930.3.2	紅参鬚	1件		(値段 40銀両)	同上	員林
1930.5.20	参	1件		129斤	中興薬材公司	台中
1930.6.28	人参	2支		1斤	捷茂薬行	台北

日本語では、人参は畑で作る野菜の一種である。黄色や赤色をした根を食用にする。しかし、上海寿康薬行が漢方薬三角形販路を通して台湾の関係商社に輸出した人参は、食用に供しているものではなく、薬用人参・オタネニンジンの細根を除いた根であり、サポニン配糖体をはじめ多くの成分を含み、強壮剤としてまた健胃剤として愛用されるが、新陳代謝機能の衰弱している場合にも甚だ有効である。

江蘇新醫學院編『中醫大辭典』（上冊）によれば、人参の別称には人衛・鬼蓋（出典：『神農本草經』）、土精・神草・黃參（出典：『吳普本草』）、地精（出典：『廣雅』）、白尺杵（出典：『本草圖經』）、海腹・精井玉蘭・孩兒參（出典：『本草綱目』）などがある。⁽³⁾

難波恒雄『和漢薬百科図鑑』[1]は次のように述べている「(人参は)『神農本草』の上品に収載され、古来から最も珍重された補薬である。古名は人蔘で、その根が人の形に似ているからだといわれている。『証類本草』によると人参は上党(山西省潞安)に産するものが良品で、遼東(遼寧省瀋陽市東南、遼水以東)に産するものは次品であるとあるが、現在では東北諸省とくに吉林省にわずかに野生するのみで、朝鮮半島、日本で多く栽培されている。」⁽⁴⁾

上海寿康薬行が長崎泰益号の仲介により台湾関係商社に輸出した人参は、朝鮮に産する少数の高麗参を除いて、主に吉林省をはじめ中国東北産の野生の人参である。なぜなら、百年近く前の中国、特に中国東北地方には人参を栽培する産業は殆どなかった。長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年11月27日、1928年2月26日、同年4月15日、6月2日、7月30日、8月5日、1929年4月3日、同年7月8日、7月23日、10月1日、1930年2月3日、同年3月2日、5月20日、6月28日などの商務書簡によれば、その20日ぐらいの間に該薬行が台湾の関係商社に輸出した人参は6件、1箱、56包、35盒、8匣・4支である。

統計表1にみえる件は最大の重量単位である。1件の最小の重量は57.68

斤であり、最大の重量は240斤である。もし、平均して1件の148.84斤の標準で推算すれば、6件の人参の総重量は893斤に上った。これはその輸出量の大きさを反映する。

寿康薬行の輸出商品には参・人参・紅参・抄参・石柱参・高麗参・参鬚・紅参鬚・天字別直参などがある。

参は人参の略称であり、紅参・抄参・石柱参・参鬚・紅参鬚などはみな人参の加工品の名称である。人参はその調整法により白参と紅参とに大別できる。人参の細根を除いた根またはこれを軽く湯通しして乾燥したものを白参といい、細根をつけたまま蒸し上げ乾燥したものを紅参という。石柱参は大型の白参であり、参鬚は白参の細い根であり、紅参鬚紅参の細い根である。

同一品種の人参の品質は、その最小の重量単位である1支の人参の重さによって決まる。1支は薬用人参の1本であり、最小の重量単位でもある。1930年2月3日と6月28日、寿康薬行は謝協源薬行にそれぞれ2支と2支即ち2本と2本の人参を輸出した。その純重量は何れも1斤に達した。平均して1本の人参の純重量は0.5斤になる。これらはみな大型の薬用人参であり、高品質の薬用人参でもある。なお、1929年10月1日、寿康薬行の輸出した一本の天字別直参はとても太く重く、純重量は1斤に達し、その代金は116銀両に上った。大体、これは極めて珍奇な人参の最高品だと考えられていたらしく、泰益号の本店に直接入荷された。後に台湾のある商社に転売されたかどうかは関係資料の紛失で判明できない。以上は、一角度からみても寿康薬行から輸出された薬用人参の品質の好さが窺える。しかしながら、寿康薬行から輸出された薬用人参は全てが高級品ではなく、欠陥品もあり、粗末品もある。例えば、参鬚・紅参鬚などはみな人参の原材料を加工する時に残った「下脚料」(材料の切れ端、くずもの)であり、大変安いけれども薬効がまだある。1930年3月2日、寿康薬行が員林地方の謝協源薬行に輸出した1件の紅参鬚の値段は僅か40銀両である。1件148.84斤の平均標準で推算すれば、1斤の紅参鬚の値段は0.27銀両にすぎない。日本植民地時代の台湾住民は貧富の差

が大きく、貧しい勤労大衆が全人口の大部分を占めていた。寿康薬行が高価な人參と安価な人參とをそれぞれ輸出していたことは、台湾各階層住民の異なる需要に応えようとしたものである。それゆえ、人參貿易における寿康薬行の取引先は台湾各地に散在していた。例えば、台北に捷茂薬行、台中に中興薬材公司、彰化地方に榮徳商行、また、前述の員林地方に謝協源薬行がそれぞれ存在していたのである。

B 当帰の取引についての統計と分析

当帰は人參に次いで上海寿康薬行より輸出された貴重な滋養薬の大項目であった。しかし、商務書簡の紛失で該薬行から輸出された当帰の全貌を解明することはできない。幸い、1927年7月から1930年11月までの泰益号あて寿康薬行の7通の書簡には、輸出当帰の品目や重量及び入荷商社の名称などが記録されている。以下では、このわずかなデータに基づいて統計表2を作成して分析する。

表2 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された当帰の部分データの統計⁽⁵⁾

出荷期日	薬種名	単位	総重量	純重量	輸入商社	地域
1927. 7. 5	当 帰	5 件			万成昌薬行	台北
1927. 7. 5	当 帰	2 件			謝協源薬行	員林
1927. 7. 5	当 帰	6 件			参 奇 薬 行	台北
1927. 7. 5	当 帰	1 件			復 興 薬 行	台南
1927. 7. 5	当 帰	8 連			謝協源薬行	員林
1929. 6. 26	川 帰	2 連			台湾薬材公司	台北
	西 帰	5 連				
1929. 11. 23	川 帰	1 連			建 昌 薬 行	台南
	西 帰	1 連				
1930. 2. 3	当 帰	1 件			謝協源薬行	員林
1930. 5. 20	当 帰	1 件		170斤	中 興 薬 行	台中
1930. 6. 30	当 帰	1 件		170斤	謝協源薬行	員林
1930. 11. 30	川 帰	1 連			建 昌 薬 行	台南
	西 帰	2 連				

当帰はセリ科に属するトウキと呼ぶ植物である。元来は自生の多年草であるが、近代以降薬用植物として栽培されている。太く短い主根から多数の支根が出ているが、それを採って一旦湯通した上乾燥させたものを当帰という。

本物の当帰は中国原産のカラトウキの根であり、血を通す功があり、昔から婦人科、産科の要薬及び補血・強壮などの薬効を持つ滋養の薬として用いられている。

中国当帰の主産地は甘粛省、雲南省であるが、陝西省、四川省、貴州省、湖北省などにも生育している。80年近く前の漢方薬三角形販路における当帰の名称には、当帰・川帰・西帰などがあった。前述の通り、川帰は四川省産出の当帰であり、西帰は貴州・雲南など中国西南部産出の当帰である。

漢方薬三角形販路での当帰の輸出量には、乾泰薬行と同康薬行がそれぞれ第一位と第二位を占めていた。上述の両店を除けば、当帰輸出量が比較的大きいのは主に裕孚系と鼎成系の薬行例えば裕孚薬行・寿康薬行・鼎成薬行などであった。

表2、即ち泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された当帰の統計は、泰益号宛て寿康薬行の1927年7月5日、1929年6月26日、同年11月23日、1930年2月3日、同年5月20日、6月30日、11月30日の商務書簡の関係データに基づいて作成されたものである。該統計表により、寿康薬行は漢方薬三角形販路を通して台北の万成昌薬行・参奇薬行・台湾薬材公司、台南の建昌薬行・復興薬行、台中の中興薬行、員林の謝協源薬行などに重量単位16件、20連の当帰、川帰、西帰を輸出したことが分かる。1930年5月30日と6月30日、寿康薬行は謝協源薬行にそれぞれ1件の当帰を輸出した。その純重量はみな170斤である。この基準で推算すれば、16件だけの当帰の総重量は2720斤にも上った。泰益号宛て寿康薬行の商務書簡には1連の当帰の重量がはっきりと記録されていないが、20連の当帰の総重量は少なくないものと推測される。これは寿康薬行の当帰の輸出量の大きさを物語る。

C 黄耆の取引についての統計と分析

黄耆も長崎泰益号の仲介により上海寿康薬行より輸出された貴重な滋養薬の重要品目である。遺憾ながら、黄耆の取引データが記録される泰益号あて寿康薬行の残存商務書簡は8通しかない。さいわい、この少なく珍しい書簡はみな1927年7月から1929年8月までの2年間に発信され、しかもその中の何通かの書簡には取引された黄耆の総重量と純重量が具体的に記入されている。こういうわけで、8通の書簡中の関係データの統計と分析を通して、長崎泰益号の仲介による上海寿康薬行の黄耆輸出の概況はうかがうことができる。

表3 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された黄耆の部分データの統計⁽⁶⁾

出荷期日	薬種名	単位	総重量	純重量	輸入商社	地域
1927. 7. 5	晉 耆	3 件			参 奇 薬 行	台北
1927. 7. 5	晉 耆	1 件			謝協源薬行	員林
1927. 7. 5	晉 耆	1 件			徳 興 商 行	台南
1927.11. 5	晉 耆	1 件	314斤	232.9斤	乾 元 薬 行	台北
1928. 2. 23	晉 耆	1 件		382斤	謝協源薬行	員林
1928. 2. 23	晉 耆	1 件	352斤	269.4斤	同 上	員林
1928. 7. 8	晉 耆	2 件			同 上	員林
1928. 7. 30	晉 耆	1 箱	335斤	2 箱合わせ て483斤	捷 茂 薬 行	台北
	晉 耆	1 箱	334斤			
1929. 6. 26	晉 耆	1 件			台湾薬材公司	台北
1929. 7. 8	晉 耆	2 件			謝協源薬行	員林
1929. 7. 23	晉 耆	2 件			同 上	員林
1929. 8. 5	晉 耆	2 箱			林協興商行	台北

黄耆はマメ科の多年生の植物キバナオウギ、またはその他の同属植物の根であり、カラオーギともいう。該薬物は腎疾患、内臓下垂、関節リュウマチ、肩関節周囲炎、卒中後の痺れ感などに用いる治療薬だけではなく、老衰を防ぎ、強壯を目指す滋養薬でもある。

山下弘『漢方薬全書』は次のように述べている。「オーギはカラオーギともいい、中国が原産地であり、わが国では産しない。豆科の多年生の植物で太い根が地下に横に這う。その根を秋に採取し、細い根を除いてよく水洗いしたもの、を、天日で充分乾かして薬用する。その成分ははっきりしないが、汗止め、利尿、強壮などの薬効がある。」⁽⁷⁾

中国内地原産の黄耆は植民地時代の台湾住民にも愛用されていたので、当時漢方薬三角形販路の重要な取引品目となっていた。上海の協成元記・鼎成薬行・寿康薬行など10軒近くの出荷商社が、この取引に参入していた。表3、泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された黄耆の部分データの統計は、泰益号宛て寿康薬行の1927年7月5日、同年11月5日、1928年2月23日、同年7月30日、1929年6月26日、同年7月23日、8月5日の商務書簡の関係データに基づいて作成されたものである。該統計表によれば、寿康薬行は漢方薬三角形販路を通して台北の林協興商行・乾元薬行・参奇薬行、員林地方の謝協源薬行に重量単位10件、2箱の黄耆を輸出した。

上海寿康薬行と台湾の関係商社との黄耆の取引には二つの特徴がある。

その一。取引された黄耆がみな良品である。黄耆の品質はその産地によって異なる。古代ないし近代では、山西省産出の黄耆は品質がよくてその名が広い。統計表3に示されたように、寿康薬行と台湾の関係商社が取引した黄耆はみな晋耆である。晋は山西省の略称である。晋耆は即ち山西省産出の黄耆であり、高品質の黄耆である。これとは異なり、協成元記と鼎成薬行の出荷した黄耆はみな紅耆などである。

その二。成約商品の重量単位が大きい。例えば、1927年11月5日、寿康薬行と乾元薬行とが取引した1件の晋耆の総重量と純重量はそれぞれ314斤と232.9斤に達し、1928年2月23日、寿康薬行と謝協源薬行の取引した1件の晋耆の総重量と純重量はそれぞれ352斤と269.4斤に上った。同年7月30日、寿康薬行と捷茂薬行とが取引した2箱の晋耆の総重量と純重量はそれぞれ669斤と483斤に達した。黄耆、とりわけ晋耆は貴重な滋養薬である。取引中、こ

のような大きな重量単位で決算するのは漢方薬三角形販路においてはごく稀である。

D 他の滋養薬の取引についての統計と分析

上海寿康薬行が長崎泰益号の仲介により台湾の関係商社に輸出した貴重な滋養薬は、前述の人参、当帰、黄耆を除けば、ほかに大云（肉苁蓉）、冬虫草、燕窩、蓮子、菊花、大棗、木耳、毛菇などがある。1927年4月から1930年5月まで、泰益号宛て寿康薬行の27通の商務書簡には以上の薬材の取引状況が記される。

表4 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された他の滋養薬の部分データの統計⁽⁸⁾

出荷期日	薬種名	単位	総重量	純重量	輸入商社	地域
1927. 4. 8	蓮子	1件			捷茂薬行	台北
1927.10.22	蓮子	1包	150斤	125.8斤	林協興商行	台北
1927.11. 2	蓮子	1包			謝協源薬行	員林
1927.11. 5	水蓮	1包		6斤	万成昌商行	台北
1927.12.15	蓮子	1件			林協興商行	台北
1927.12.18	杭菊	1件		80斤	万成昌商行	台北
1928. 1.22	杭菊	4件			台湾薬材公司	台北
1928. 1.29	杭菊	4件			同上	台北
	毛菇	1件				
	菊花	3件				
1928. 2.20	大云	1件	153斤	124斤	東昌薬行	台南
1928. 2.20	大云 (肉苁蓉)	1件	322斤	220斤	台湾薬材公司	台北
1928. 2.20	冬虫草	10封		8斤	捷茂薬行	台北
1928. 2.20	紅蓮子	1件	143斤	120斤	同上	台北
1928. 2.20	蓮鬚	1件	130斤	90斤	台湾薬材公司	台北
1928. 2.26	紅蓮鬚	1件		100斤	謝協源薬行	員林
1928. 3.26	杭菊	200包	(郵送の包)	90斤	茂順薬行	鹿港

戦前期上海裕孚系の企業グループと長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易(七)

1928. 4. 15	蓮 子	1 包	149斤	124.1斤	謝協源薬行	員林
	杭 菊	200包		85斤		
	黄 菊	合わせ	62斤	52.6斤		
	毛 菇	て 1 件	45斤	38.25斤		
1928. 4. 20	黄 菊	1 件	190斤	130.5斤	乾 元 薬 行	台北
1928. 5. 8	木 耳	1 包			万成昌薬行	台北
1928. 6. 2	黄菊双芽	2 件			謝協源薬行	員林
1928. 6. 22	白 蓮	1 蓮			林協興商行	台北
1928. 6. 24	白 蓮 子	3 包			同 上	台北
	紅 棗	8 包				
1928. 6. 26	白 木 耳	1 包		2 斤	同 上	台北
1928. 11. 14	白 蓮 子	1 包			捷 茂 薬 行	台北
1929. 4. 3	木 耳	1 包			同 上	台北
1929. 5. 15	杭 菊	1 件			茂 順 薬 行	鹿港
1929. 7. 8	菊 花				謝協源薬行	員林
1929. 7. 23	菊 花				同 上	員林
1929. 8. 1	棗 杞	2 件			参 奇 薬 行	台北
1929. 11. 19	木 耳	合わせ て 1 盒 (郵送)		重量各0.4両 (代金合計 23.15銀両)	捷 茂 薬 行	台北
	燕 窩					
1929. 11. 19	棗 杞	1 件	157斤	108斤	乾 元 薬 行	台北
1929. 12. 1	棗 杞	3 件			建 昌 薬 行	台南
1929. 12. 1	棗 杞	1 件			参 奇 薬 行	台北
1929. 12. 1	棗 杞	1 件			捷 茂 薬 行	台北
1930. 2. 3	木 耳	5 件			謝協源薬行	員林
	毛 菇	1 件				
1930. 3. 2	滁 菊	1 件		(値段 35銀両)	同 上	員林
1930. 3. 9	菊 花	1 件		90斤	同 上	員林
1930. 4. 3	棗 杞	1 件		125斤	参 奇 薬 行	台北
	白 蓮	1 件		245斤		
1930. 5. 8	蓮 子	1 件		300斤	捷 茂 薬 行	台北

1930. 5. 9	白 蓮	2 件	(1 件は裕 孚 洋 行 所 有)		捷 茂 薬 行	台北
1930. 5. 16	杭 菊	210包		89.25斤	茂 順 商 行	鹿港

表4には、普通の滋養薬、例えば菊花（杭菊、滁菊、黄菊、黄菊雙芽などを含む）、木耳（白木耳などを含む）、蓮子（水蓮、白蓮子、紅蓮子、蓮鬚などを含む）、大棗（紅棗、棗杞などを含む）、ないし食事療法に供する毛茹などの取引データも見えるが、以下では燕窩、大云（肉苁蓉）、冬虫草の取引のみを簡単に分析したい。

- a 燕窩はツバメの巣であり、高級・高価な滋養薬である。翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』は次のように述べている。「燕窩は産額が少なく、採集が困難で危ないため、珍重されて非常に高価であるから、漢方薬三角形販路での取引回数と成約高は共にあまり多くない。泰益号宛て上海出荷商社の現存する商務書簡資料によれば、この取引を営む上海の出荷商社は寿康薬行1軒しかなかった。」⁽⁹⁾ 統計表4に記入されているのは上海寿康薬行と台湾関係商社との燕窩の取引データのごく一部分にすぎない。たとえば、該薬行が1929年11月19日に台北の捷茂薬行に郵送した燕窩は0.4斤だけである。しかし、長崎泰益号宛て大阪商船門司支店の1930年5月7日付けと同月10日付けの運賃請求書によれば、台北の万成昌薬行と台南の昌興棧商号は上海の寿康薬行から4口の燕の巣（燕窩）を入荷した。その1口の重量は46斤（値段230.00円、税率40%、税額92.00円）、他の1口の重量は10斤（値段50.00円、税率40%、税額20.00円）であった。このことは、上海寿康薬行と台湾関係商社との燕窩の取引回数と重量がかなりの程度あったことを推測させる。
- b 大云の正式名称は肉苁蓉である。「該薬物は古代中国の統治者に回春・不老・精力増強の霊薬として普遍的に服用されただけではなく、今から1200年ほど前に日本の奈良朝にも送呈された。正倉院に現存する肉苁蓉の実物

は当時中日両国の支配層が該薬物をいかに愛用していたかを立証している。清朝の末期にいたっても、この風習はまだ変わってはいなかった。例えば、西暦1880年2月5日、西太后服用の長春益寿丹、及び190□年8月29日、光緒帝服用の古方長春益寿広嗣丹には、何れも肉苁蓉が含まれている。¹⁰⁾ 上述の薬文化の背景下で、肉苁蓉も80年近く前の漢方薬三角形販路で取引された一項目となっていた。上海寿康薬行と乾泰薬行も該取引を営んだ。統計表4によれば、寿康薬行は1928年2月20日に台北の台湾薬材公司与台南の東昌薬行にそれぞれ322斤の1件と153斤の1件の肉苁蓉を輸出した。これは寿康薬行の肉苁蓉の輸出が一定の量に達していたことを裏付けている。しかし、人參、当帰、黃耆などの輸出量と比べれば、肉苁蓉の輸出量はやはり多くはない。その理由の一つは交通と価格の両方にあると考えられる。中国原産の肉苁蓉は内蒙古、甘肅、陝西、新疆などの砂漠地帯で、塩分が多く特殊な草木しか生育しないような不毛の地に自生している貴重な野生薬物である。主産地と出荷地との距離は遠く、交通がとても不便であった当時、その価格の高騰は台湾の住民の購買力を超えていた。普通の台湾住民にはこの高価な滋養薬を購入する能力が殆んどなかったのは当然のことである。

- c 冬虫草の全称は冬虫夏草であり、体を暖め、生命力を高める作用があり、主に補陽薬としてよく使用される貴重な滋養薬である。上海の出荷商社では寿康薬行、乾泰薬行、同康薬行が該薬材の輸出業務に従事していた。寿泰薬行はその代表である。例えば、1928年2月20日、寿泰薬行は10封の重量単位、8斤の冬虫夏草を台北の捷茂薬行に輸出した。乾泰薬行、同康薬行の冬虫夏草の輸出の重量単位は1件、1箱、2小箱、2包、2小包であるが、その総重量は70斤足らずに止まっていた。冬虫夏草は新疆など辺境に自生する薬材であり、産額が小さく、運賃が高くて、漢方薬三角形販路での取引量も少ない。乾泰薬行、同康薬行の冬虫夏草の輸出に比べて、寿康薬行が1回、捷茂薬行に郵送した冬虫夏草は10封の重量単位、8斤の純

重量に達した。これは寿康薬行の冬虫夏草の輸出量が可成りあったことの一端を物語る。

要するに、裕孚系企業グループの重要な一メンバーたる寿康薬行は漢方薬三角形販路に参入した最初の上海の出荷商社の一軒であり、取引の期間が長く、通関・転送・決済代理人としての長崎泰益号との関係が一番複雑であった。該出荷商社を代表として80年近く前の上海・長崎・台湾間における漢方薬取引の特殊なルート进行分析し、その特徴を掴み、取引過程での幾つかの問題点を概括するのは、漢方薬三角形販路研究のポイントであるといえる。⁽¹¹⁾

註

- (1) 翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』上海社会科学院出版社、2001年2月、第1版発行、第169～184頁、参照。
- (2) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年11月27日～1930年6月28日の商務書簡中の関係データ、参照
- (3) 江蘇新醫學院編『中醫大辭典』（上冊）上海人民出版社、1977年7月、第1刷発行、第29頁。
- (4) 難波恒雄『和漢薬百科図鑑』[1] 保育社、1997年11月30日、改訂新版発行、第1頁。
- (5) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年7月5日～1930年11月30日の商務書簡中の関係データ、参照。
- (6) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年7月5日～1930年11月30日の商務書簡中の関係データ、参照。
- (7) 山下 弘『漢方薬全書』緑樹出版社、1992年6月10日、第1版発行、第549—550頁。
- (8) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年7月5日～1930年5月16日の商務書簡中の関係データ、参照。
- (9) 同註(1)、第81頁、参照。
- (10) 陳可翼等『慈禧光緒医方選議』東京美術出版社、1983年11月15日、第1版発行、第221頁、参照。

戦前期上海裕孚系の企業グループと長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易(七)

(11) 同註(1)、第83～84頁、参照。

(未完)